

第六章

新植民地——その急速な人口増加の理由——北米植民地——辺境開拓地に見られる驚異的な増加の実例——戦争・疫病・飢饉・天変地異の荒廃から、古い国家でさえいかに速やかに立ち直るか

衛生状態がよく、気候にも恵まれ、住居や食料に余裕があり、広大で肥沃な土地を擁する新しい植民地では、人口が一貫して驚くほど速く増えることは広く認められている。古代ギリシャのいくつかの植民都市は、やがて人口や勢力で本国に肩を並べ、時にはこれを上回った。新大陸の欧州人の植民地もこの見方を裏づけており、この点はおおむね争いがない。わずかな代価、あるいは無償で手に入る肥沃な土地の豊富さは、他の障害を凌いで人口を押し上げる強力な要因である。統治の拙劣さという点では、メキシコ、ペルー、キトのスペイン植民地が最悪の例に数えられる。本国の専制や迷信、悪弊はそのまま移植され、王権は法外に重い税を取り立て、交易には恣意的で厳しい制限が課さ

れた。総督もまた、君主と自身の利益のために貪欲に収奪した。それでも人口は急速に増えた。征服後に築かれたリマは、ウジヨアの記録によれば五十年ほど前の時点で人口五万に達していた。先住民の小集落にすぎなかったキトも、同時期にほぼ同規模に達したとされる。メキシコ市は人口十万とされ、スペイン人の記述に誇張があったとしても、モクテスマ時代の約五倍に達していたと見積もられる。

ポルトガル統治下のブラジルでも、圧政はおおむね同程度であった。三十年前の推計では、欧州系住民は六十万人規模に達していた。

オランダ領やフランス領の植民地は、アダム・スミス博士が「考えうる統治のうち最悪」と評した独占商業会社の支配下にありながら、数々の不利な条件にもかかわらず繁栄を保った。

しかし、英領北米の植民地は、のちに米国という強力な国家を形成し、その発展の速さは群を抜いていた。スペインやポルトガルの植民地と同様に良質な土地に恵まれ、自由と平等の水準も高かった。対外交易には一部制限があったが、内政はほぼ全面的に自治できた。当時の制度は財産の移転と分割を促し、一定期間耕作されない土地は他者に与えると定めていた。ペンシルベニアには長子相続制がなく、ニューイングランド諸州

でも長子の取り分は二倍に限られていた。各州には十分の一税がなく、税負担は軽かった。良質な土地がきわめて安価だったため、資本の最善の投下先は農業となり、最も健康的な労働を最大限に生み出し、社会に最も価値ある産出をもたらした。

こうした好条件が重なり、歴史上まれに見る速さで人口が増加した。北部の植民地全体では、人口は二十五年ごとに倍増するとされた。一六四三年、ニューイングランドの四つの植民地に入植した初期の移住者数は二万二千二百人だった（数値はプライス博士『復帰支払に関する考察』全二巻による。典拠とされるスタイルズ博士の小冊子は手元がない）。その後は入植者の流入より流出のほうが多かったとみられるが、一七六〇年には人口は五十万人に達した。したがって、全期間を通じて人口は二十五年ごとに倍増したといえる。ニュージャーシーの倍加年数は二十二年、ロードアイランドはそれより短かった。内陸の入植地では住民が農業に専念し贅沢がなく、十五年で倍増したという顕著な増加が確認された。他方、先に開発された沿岸部の倍加年数はおよそ三十五年で、海港都市の一部では人口は停滞していた。

一見、こうした状況では地球の生産力は人類に必要な食料を十分に賄えそうに思える。しかし、人口と食料が同じ割合で増えるわけではない。人口は幾何級数的に、食料は算

術級数的に増える。すなわち、前者は掛け算で増え、後者は足し算で増える。人口が少なく肥沃地が多いうちは、年ごとの食料増産は、ゆるやかな流入で満ちていく大きな貯水池のように安定して見込める。人口が急速に増えれば汲み手が増え、取り出し量は年々増すが、その分、貯水池は早く空になり、やがて流入分しか残らない。肥沃地が区画ごとに使い尽くされていくにつれ、食料の増え方は既存の耕地の改良に頼るほかなり、その伸びも次第に細る。他方、供給が続く限り人口の増勢は止まらず、一度の増加が次の、より大きな増加を呼び、際限がない。

現実には、人口増加を抑える二大要因である貧困と悪徳が取り除かれるほど人口は増え、増加の速さこそ人々の幸福と善良さを示す最も確かな指標だとわかる。職業上の必要から都市に暮らす人もいるが、都市の不衛生は貧困の一形態とみなすべきだ。家族扶養の困難を見越して結婚をためらわせる程度のささやかな自制もまた、この範疇に入る。要するに、人口の増加を抑える要因で、貧困か悪徳に当たらないものを挙げるのは難しい。

戦争前、アメリカ十三州の人口は約三百万人と推計されていた。しかし、その人口を生み出した移住元が小規模だったからといって、当時の英国の人口が減っていたとは誰

も見ない。むしろ、一定の移住は母国の人口に好影響を与えることが知られている。実際、アメリカへ最も多くの人びとを送り出したスペインの二つの地方では、かえって人口が増えた。では、北米植民地で急増した英国人について、もし同数が同期間英国にとどまっていたとして、なぜ同程度の増加が起きなかったのか。最大の理由は、土地と食糧の余裕が乏しく、生活が苦しかったからである。そして、それが悪習よりはるかに強い要因であることは、古い国家でさえ戦争や疫病、自然災害から驚くほど速く回復するという事実が示している。そうした局面では、その国家の条件は一時的に新興国に近づき、結果はつねに予想どおりになる。住民の勤勉さが恐怖や専制にくじられないかぎり、生計手段は減った人口の需要をほどなく上回り、停滞していた人口は直ちに増加へ転じる。

肥沃なフランドル地方は幾度も激戦の舞台となったが、数年の平穏があれば生産も人口も着実に回復してきた。ルイ十四世によって荒廃したプファルツも、のちに立て直された。一六六六年のロンドンの大疫病の影響も、十五年から二十年後にはほとんど見えなくなった。中国やインド亜大陸で最悪級の飢饉が起きても、記録上その痕跡はほとんど薄れる。周期的に疫病が出るトルコやエジプトでも、そのために平均人口が大きく減

ったとは断定しがたい。仮に今の人口が昔より少ないとしても、主因は専制と抑圧が農業を萎縮させたためで、疫病による直接の損失ではないとみられる。火山噴火や地震のような大規模な自然現象も、住民の移住を強いるほど頻発せず、働く意欲が損なわれないう限り、国家の平均人口への影響は軽微にとどまる。ベスビオ山麓のナポリ一帯はたび重なる噴火にもかかわらず人口が多く、リスボンやリマも、直前の大地震以前と比べて、人口水準はおおむね変わらないとみられる。